

										昭 16	年 月 日	概 要	
8	8	同	7	7	7	7	7	7	7	7			16
1	1	日	30	28	27	26	25	24					<p>第一五野戦兵器廠略歴</p> <p>通称号 岩第二六三二部隊</p> <p>特臨編一六令付第一二八号により編成下令</p> <p>編成要員として赤羽（東部第一四部隊）に約五〇〇名召集</p> <p>宮崎大佐指揮の下に赤羽出發</p> <p>大阪着</p> <p>大阪港出帆</p> <p>朝鮮釜山上陸</p> <p>釜山出發</p> <p>鮮満国境凶們通過</p> <p>牡丹江省東寧県大肚子川着</p> <p>関東軍野戦兵器廠東寧支廠よりの転入者を加えて大肚子川において編成完結</p> <p>同日よりつぎのように各地に分散駐屯し、付近の部隊に対して、兵器、彈藥の</p>
												摘 要	

2214

至自	昭 20	昭 18
77 6	5	7 1
28 20		より
<p>本廠は、大肚子川より間島へ、一部は、大肚子川に残留し、大肚子川支廠とな</p> <p>つぎのように移駐</p> <p>「と」号演習により人員および兵器、弾薬等の後方移動に着手</p>	<p>肚子川出発間島着</p> <p>間島省延吉県間島に本廠移駐のため先発隊として中尉内田憲吾以下一ヶ中隊大</p> <p>警備中隊の増強（大尉外山勇吉以下四八五名）</p> <p>軍令陸甲第六九号により編成改正</p>	<p>補給、修理業務</p> <p>本 廠……大肚子川 南倉庫</p> <p>出張所……城子溝</p> <p>河 沿</p> <p>老黒山</p> <p>南天門</p> <p>南方および後方へ人員、物資の移動</p>

至自			昭 20		
11	11 11	10	8	8	8
7	11 3	2	20	9	9
<p>第一大隊は満洲里經由入「ソ」 同地出発</p>			<p>日「ソ」開戦後、兵器、弾薬の補給業務の続行 間島において武装解除</p>		
<p>同日将校、下士官兵に区分され、それぞれの収容所に収容 将校は間島将校第一、第二大隊に編入</p>			<p>日「ソ」開戦、開戦後の行動はつぎのとおり 本 廠</p>		
<p>老黒山出張所は八道河に、一部残留 城子溝出張所は明月溝に、一部残留 河沿出張所は六月初めに南天門を吸収し移駐しなかつた。 部隊の後方移動にともない兵器、弾薬輸送のため、大臧廠、羅子溝、大興溝、 狼溪、石頭の各地に弾薬交付所を設置分駐した。</p>			<p>る。</p>		

		昭 20	至自	至自	至自	
8	8	7	12 9	12 9	9 8	12
11	9	20	下旬	12 25 4	25 25	1
<p>本廠が間島に移駐した後約二〇〇名大肚子川に残留、支廠を開設 同日より付近部隊へ兵器弾薬の補給業務 日「ソ」開戦 本廠に合流するため大肚子川出發</p>			<p>第二大隊は卯春經由入「ソ」 下士官兵は、間島各作業大隊に分散編入 同地出發 卯春經由入「ソ」 廠長</p>			
		大肚子川支廠	初代	二代	三代	四代
			至自 16 18 9 7	至自 17 18 7 9	至自 19 17 12 7 15 19	自 19 12 16 以降
			中佐 北原 榮	大佐 田村	大佐 松尾 熊雄	大佐 塚本 善太郎

			昭 20	昭 16
	8	8	7	8
	16	10	28	ごろ <sup>7</sup>
<p>所長 初代 中尉 寺戸 研一</p> <p>二代 少尉 梶井 基彦</p> <p>三代 少尉 村山 保</p>	<p>明月溝着、主力に合流、以後同行動</p> <p>同地出發</p>	<p>日「ソ」開戦にともない主力に合流するため</p> <p>一部は城子溝に残留</p>	<p>主力は移駐のため城子溝出發、明月溝着、同地に支廠開設</p> <p>尉以下、下士官ならびに軍属約二〇名を加えて支廠開設</p>	<p>城子溝出張所</p> <p>大尉 前田 正文</p> <p>支廠長</p> <p>間島に到着、本廠に合流、以後本廠と同行動</p>

昭 20	昭 16	昭 20							
8	8	8	8	8	8	8	8	8	7
9	2	2	27~28	20	15	9	3	28	
<p>城子溝出張所の主力をもつて明月溝出張所開設 第二〇野戦兵器廠明月溝彈藥集積所の業務を引継ぎ同地付近部隊に兵器、彈藥の補給修理 日「ソ」開戦 停戦 明月溝において武装解除を受け、以後行軍により間島に向かう。 間島収容所に収容、本廠に合流、以行同行動 所長 少尉 村山 保 老黒山出張所 老黒山に出張所を開設、同地付近の部隊に兵器、彈藥の補給、修理 主力は八道河に移駐、八道河出張所となる。一部は老黒山に残留 残留隊員は、日「ソ」開戦にともない間島の主力に合流するため</p>									

				昭 20									
8	8	8	8	8			8	8					
18	17	15	9	2			14	11					
所長 少尉 木元 政太郎	間島着、本廠に合流、以後同行動	同地出発	停戦	日「ソ」開戦	同日より同地付近部隊に兵器補給、修理	老黒山出張所の主力をもつて開所	八道河出張所	初代 中尉 重富 信雄	二代 中尉 山口 達夫	三代 中尉 西家 正起	四代 少尉 木元 政太郎	間島着、本廠に合流、以後同行動	老黒山出発、途中大肚子川支廠に合流

至自			至自			昭 20	昭 16
98	8	8	88	8	6	8	
24	30	18	12	11	10	9	1
<p style="text-align: center;">河沿出張所</p> <p>河沿に出張所を開設</p> <p>同日より同地付近部隊に兵器、弾薬の補給、修理</p> <p>「と」号演習により南天門にあつた倉庫を閉鎖し、河沿出張所に吸収</p> <p>日「ソ」開戦にともない軍人、軍属の家族を弾薬庫に収容</p> <p>「ソ」軍の攻撃により多大の損害をうけ分散行動となる。橋本准尉以下約一〇名は、弾薬庫の家族の情況不明のため、同地に残留連絡にあたる。</p> <p>弾薬庫内収容者全員手榴弾により自決</p> <p>橋本准尉以下のものは同地出発、間島に向かつたが、途中「ソ」軍の攻撃、満人の暴徒により各所で損害をうけその都度小教人員に分かれて行動</p> <p>主力は間島において武装解除をうけ、同地の作業大隊に編入、入「ソ」</p> <p>なお一部のもの、天橋嶺、蘭崗、金蒼等で武装解除をうけ、教化、金蒼の各作業大隊に編入後入「ソ」</p>							





							年月日	概要	摘要
8	7	7	7	7	7	7	昭 16		
2	28	27	20	19	18	16	特臨編一六令付第一二八号一により編成下令		
関東軍野戦兵器廠の将校、下士官ならびに軍属を加えて編成完結							姫路市(中部第五一部隊編成担任)において兵庫、岡山各県出身の予備役、補充兵役のものを基幹として編成		
間島省即春着							某中尉以下約二〇〇名は姫路市出発、同日大阪着		
鮮満国境凶們通過							天保山港出帆		
釜山港着(列車の関係二、三泊)							下関港着		
下関出発									

昭 20	昭 20	昭 17 6 7
8	8	8
11	10	9
<p>同日より琿春付近の各部隊に対し、兵器、弾薬の補給ならびに修理を実施、以後日「ソ」開戦まで、同任務の続行</p> <p>間島省杜荒子に出張所を開設（長、少尉香川太市転出後、少尉大仲驥子雄）</p> <p>延吉県八道河子に、隊員約三〇名を派遣、弾薬集積所を開設</p> <p>延吉に、移動準備のため、約四五名（長、庭田少尉）が、派遣隊として分遣。</p> <p>延吉県明月溝に、弾薬集積所勤務員として約三〇名を分遣。</p> <p>日「ソ」開戦後の各隊の行動、状況は次のとおり。</p>		
<p>本 廠</p>		
<p>日「ソ」開戦とともに、延吉に後退の軍命により、集積の兵器、弾薬ならびに書類を焼却後、延吉を出発、穩城に向う（この間に移動修理班（長、加藤中尉）を凶們に派遣）</p> <p>穩城を列車により出発、同日夜凶們着（一泊）</p> <p>凶們より列車で出発、同日延吉着、延吉派遣隊が合流（以後同行動）後、八道</p>		

				昭 20	至自	至自
8	8	8	8	8	8 8	8 8
18	11	22	17	11	28 26	25 22
<p>河子に向かう。</p> <p>八道河子において武装解除後、作業大隊に編入のため、延吉に向かう。</p> <p>延吉において、杜荒子出張所員、明月溝、八道河子各派遣隊員が合流し、以後同行動</p> <p>移動修理班</p> <p>部隊主力が、穩城より延吉に移動する途中において加藤中尉を長とする移動修理班を凶們に派遣、その後約三〇名を増派。</p> <p>凶們の状況悪化にともない全員南陽を経て、八道河子に移動</p> <p>八道河子において部隊主力と合流、以後同行動</p> <p>杜荒子出張所</p> <p>所員約二〇名を地雷製作のため、延吉へ派遣</p> <p>残余の人員は、自動車で延吉に移動、いづれも延吉において部隊主力に合流、以行同行動</p>						

9

23

## 八道河子派遣隊（彈藥集積所）

軍曹、中村豊以下約三〇名が勤務していたが、部隊主力が、八道河子に到着時これに合流することなく、武装解除後、延吉に移動、同地において第一六作業大隊編成完了後のため、第三〇作業大隊に編入（八月二十三日）

同地出発、 珲春 經由入「ソ」

## 延吉派遣隊

甲編成改正ならびに移駐準備のため、日「ソ」開戦前から庭田少尉以下四五名が延吉に分遣されたいたが、昭和二十年八月下旬部隊主力が延吉に到着時、これと合流し、以後同行動

## 明月溝派遣隊（彈藥集積所）

軍曹、木村留治以下約三〇名が勤務していたが、昭和二十年八月三日業務を第一五野戦兵器廠に申し送り中、日「ソ」開戦となり、隊員の一部は、八道河子において、同主力は延吉においてそれぞれ部隊主力と合流、以後同行動

2226

				昭 20
				9
11	10	9	9	
11	20	13	初	
<p>注 間島と延吉は同一である。</p>				
<p>本廠長 初代 大佐 田村清一</p>				<p>下士官、兵は、間島第一六作業大隊（長、准尉木村善一）に編入</p>
<p>二代 中佐 梶山美介</p>				<p>間島出発、 邱春 經由、入「ソ」</p>
<p>三代 大佐 土肥直一</p>				<p>將校は、間島將校第二大隊（長、大佐品部孝晴）に編入</p>
<p>四代 少佐 野本澄</p>				<p>間島出発、 邱春 經由、入「ソ」</p>

				昭	昭	年月日	特設警備第四六〇大隊 略歴
				20	19		
8	8	8	1	2			
	20	15	9	4	7		通称号 岩第七四八二部隊
<p>特設警備第四〇四大隊を基幹として編成完結</p> <p>編成地 羅津</p> <p>駐とん地 羅津</p> <p>常置人員 将 校 一</p> <p>准士官、下士官七</p> <p>編成下令特設警備第四六〇大隊と改称</p> <p>防衛召集</p> <p>羅津付近の戦闘に参加</p> <p>羅津より後退、富寧付近の戦闘に参加</p> <p>磨茂山において武装解除</p> <p>武装解除後主力は、現地解散</p> <p>若干名のは、興南、古茂山、間島等において作業大隊に編入され入「ソ」</p>							概要
							摘要

			大隊長		
	三代	二代	初代		
	終 20	至 自 20 20	至 自 20 19		
	0	6 2	2 2		
	戦 9	8 28	22 9		
	中尉	中尉	少尉		
	中	山	藤		
	村	田	井		
	謹	正	鶴		
	平	保	吉		



年月日	概要	摘要
昭 12 8 ごろ	牡丹江省東寧県三分口街において開院（仮病院） 同日より同地付近部隊の患者の治療、収療に任じた。	
昭 15 7 11 ごろ	東寧街に新築開院し業務続行 軍令陸甲才一四号により編成下令	
昭 16 7 16	東寧において編成岩才二六七一〇部隊を改称引続き病院業務続行 特臨編才一〇二号の二により編成改正	
昭 20 6 6 30 29	東寧において編成完結 引続き患者の治療および収容に従事 間島省竜井に多症のため、久保大尉以下の一部先発隊として東寧出發 竜井着	

東寧第一陸軍病院略歴  
（興東才二三陸軍病院）

通称号  
満才四六七部隊  
岩才二六七一〇部隊

2230

9	8	8	8	8	7	7	7	7			
20	19	15	9	初	末	15	14	13			
約半数は間島作業大隊に編入	職員は患者とともに延吉に移動	び開戦後竜井において収容した患者合せて約九〇〇名収容	武解後も引継ぎ業務を続行し九月中旬まで他病院よりの運送患者、および開戦後竜井において収容した患者合せて約九〇〇名収容	竜井において武装解除	停戦	日「ソ」開戦にともない周辺部隊よりの傷病者を収容	東寧才二、才三、老黒山、春化各陸軍病院の患者を珲春陸軍病院を通じて収容	東寧県境通過	延吉県竜井着、同地の小学校および外國領事館を接收病院開設より患者の収容	岡谷准尉以下一部のは残存整理のため東寧に残留	主力移駐のため東寧出発

		昭 21		自 昭 21			
		5	5	5	4	10	9
		25	中旬	12		23	下旬
<p>初代</p> <p>病院長</p> <p>延吉出発「コロ」島経由帰還</p> <p>員外となつたものは収容所に収容され、東寧才一嶺軍病院は全く解体され、延吉出発「コロ」島経由帰還</p> <p>延吉の才一、才四病院が縮少統合されて才三病院と合流</p> <p>才三病院は延吉病院と改称され、職員以下の編成替による異動により定</p> <p>延吉才三病院と合流</p> <p>延吉才二病院を開設</p> <p>延吉才六四六収容所に移動</p> <p>残余の半数病院長以下看護婦全員をもつて</p> <p>那春経由入「ソ」</p>							
二代軍医大佐	山田正雄	(自 19、2 11 至 20、8、10)					
三代軍医中佐	鈴木清	(自 19、7、22 至 20、15)					
四代軍医中佐	金光義男	(自 20、8、10 至 20、10)					

昭 20							昭 20		
8	8	8	8	8	8	7	8	8	7
17	15	12	11	10	9	13	18	9	
<p>東寧 残留隊 主力が間島省龍井に移駐したあと残務整理のため残留日「ソ」開戦 主力に合流すべく東寧出發 間島省龍井着 図們付近の部隊の負傷者收容の目的で才七九師団臨時野戦病院編成のため 間島陸軍病院に集結 停戦 間島收容所に收容以後の行動は主力に同じ</p>							<p>明月溝患者療養所 軍医中尉虎島敏治所長以下で明月溝患者療養所を開設し、付近部隊の患者の收容および治療 日「ソ」開戦 同地において武装解除をうけ、以後間島收容所に收容爾後主力と同一行動 所長 軍医中尉 虎島 敏治</p>		



昭 21		自 昭 21	
8	8	4	4
10	5	16	7
<p>主力は、「ソ」軍管理下の東京城収容所に病院を開設し、傷病者の診療に従事。寧安において武装解除を受けた一部は、東京城において主力と合流（以下同行動）</p> <p>掖河に移動し、「ソ」軍管理下の掖河病院の職員となり、診療に従事。一部は（兵約五〇名）は、掖河において作業大隊に編入され入「ソ」</p> <p>病院の将校、下士官、兵、看護婦等の大部は、中共軍に留用され、その後、中国の内戦に参加し、昭和二八年三月（中共第一次帰国）より、昭和三三年七月（中共第二次帰国）までの間に帰国</p> <p>間一部ものは、掖河第一―第四大隊に編入され、綏芬河經由入「ソ」</p> <p>少数の者は、第一次計画遣送として掖河出発、哈爾濱、「コロ」島經由二一年一〇月四日帰国</p>			
<p>病院長 初代 軍医中佐 品川</p> <p>二代</p> <p>三代 東寧一陸病長兼任（鈴木中佐）</p> <p>四代 軍医中佐 岩田 稔</p> <p>五代 軍医少佐 平田 直行</p>			

昭 18				昭 17				昭 16				昭 15	年月日	東寧第三陸軍病院 (関東軍第六七陸軍病院) 略歴 通称号 満州第三三二部隊 岩 第二六七七部隊
10	10	9	11	11	8	7	7	12	7	7	12	7		
7	6		20	8	4	29	16					10		
<p>軍令陸甲第一四号により編成下令                  牡丹江省寧安県横道河子牡丹江第一陸軍病院横道河子分院内において業務開始                  特臨編第一〇二の二号により第一二師団第一野戦病院に改編                  横道河子出發                  東寧県石門子着第一二師団第一野戦病院編成完結                  同地において診療業務に従事                  軍令陸甲第八五号により第一二師団第一野戦病院復帰下令、東寧第三陸軍病院                  編成下令                  東寧出發、横道河子着                  牡丹江省横道河子(牡丹江第一陸軍病院横道河子分院)において編成完結                  牡丹江第一陸軍病院横道河子分院の業務を引継ぎ診療業務に従事                  一部先発隊城子溝に移駐                  移駐のため横道河子出發                  東寧県境通過城子溝着</p>													概要	摘要
													摘要	

2236

		至自				昭 昭	
						20	20
		8	10 9 9	8	8 8 8	8	6
		17	10 26 15	17	14 12 10	9	末
軍医大佐	19	3	7	より	林	正美	
軍医大尉	18	10	より	鈴木	康夫		
同	17	11	20	田中	巖		
軍医少佐				園田	左式郎		
<p>病院長</p> <p>渡辺軍曹以下約五名で金蒼収容所において患者収容に当り昭和二〇年九月患者約一五〇名を伴い延吉病院に合流した。</p> <p>一部の行動</p> <p>瑛春經由入「ソ」</p> <p>金蒼第五九作業大隊（大尉田辺正夫）に編入、同日出発</p> <p>張家店着</p> <p>羅子溝↓張家店↓大興溝より反転</p> <p>大威廠着</p> <p>同地出発</p> <p>日「ソ」開戦のため第一三二旅団野戦病院の業務に任じ傷兵の収容</p> <p>編正改正により、関東軍第六七病院と改称</p> <p>同地付近部隊の傷病兵の収療</p>							



昭 昭										昭	年	月	日	
20		20		18		16		16						15
8	8	8	8	8	6	6	8	7	8	7	7			
30	16	18	10	9			31	15	1	16	10			
<p style="text-align: center;">老 黒 山 陸 軍 病 院                      ( 関 東 軍 第 三 〇 陸 軍 病 院 ) 略 歴</p> <p style="text-align: center;">通 称 号 満 第 八 六 二 部 隊                      岩 第 二 六 七 一 四 部 隊</p>														
<p>概 要</p> <p>軍令陸甲第一四号により編成下令                      同地付近部隊の傷病兵収療                      特臨編第一〇二の二号により編成下令                      老黒山において編成完結                      軍令陸甲第六九号により編成改正                      東寧県老黒山に駐とんし復帰した第八四兵站病院を吸収し、編成完結                      同日より同地付近部隊の傷病兵の収療                      関東軍第三〇陸軍病院と呼称                      宮崎大尉以下約一六、七名をもつて羅子溝に分院開設                      日「ソ」開戦にともない、収容中の患者を竜井の東寧第一陸軍病院に転送                      同地出発羅子溝着、同地の分院を掌握し第一二八師団野戦病院となり、傷兵の治                      療従に事したが、戦闘部隊の転進にともない逐次移動し、大興溝經由                      汪清県張家店着、患者の収容                      同地出発、金蒼着同地において武装解除                      主力は、金蒼第六一作業隊に編入</p>														
<p>摘 要</p>														

	10 9
	5 18
<p>同地出発          彈春經由入「ソ」          一部のものは武装解除後金蒼において約七〇名の患者を収容し、治療に従事して          いたが昭和二十年九月延吉病院に合流した。          病院長          軍医大佐 路地徳一（終戦時）</p>	

年月日		昭 15	昭 16	昭 20
7	8	7	8	8
10	24	16	1	9
概要		<p>軍令陸甲第一四号により編成下令                      特臨編第一〇二の二号により編成下令                      間島省図們において編成完結                      同日より同地付近部隊の傷病兵の収療                      日「ソ」開戦となり、琿春より入院患者を龍井の東寧第一陸軍病院に後送し、                      他の患者は、原隊復帰させ、密江に移駐、第一二師団の野戦病院を開設し、                      戦闘間の傷兵の収療                      密江屯において武装解除を受け、金蒼に収容された。武装解除前、病院長、教                      育隊長以下六〇一七〇名は別行動をとつた。これらは、途中で小「グループ」                      に別かれ北鮮に入つた者も各地で収容され、慶源または延吉の各収容所に収容                      された。                      一部の下士官以下は、金蒼第五六作業大隊に編入                      同地出発、琿春經由入「ソ」</p>		
摘要				

琿春陸軍病院  
 (関東第二二陸軍病院)  
 略歴  
 通称号 満三四二部隊  
 岩第二六七一部隊

			昭	
			21	
	9	7	4	9 下旬
			5	
<p>将校および下士官以下の主力は、金蒼より延吉に移動し「ソ」軍管理下の延吉病院の職員となり、患者の収療に従事。</p> <p>延吉病院に勤務中の下士官以下の主力は、作業大隊に編入され入「ソ」</p> <p>将校下士官等約二〇一三〇名は、中共軍に留用され、その後中共の内戦に参加し、昭和二八年三月（中共第一次帰国）より昭和三三年七月（中共第二次帰国）までの間に帰国</p> <p>延吉病院および収容所に勤務していた者で、入「ソ」しなかつた者および中共軍に留用されなかつた者は、「コロ」島経由で帰国</p> <p>病院長 軍医大佐 福山 正明</p>				

年月日		昭 20	昭 16	昭 15
7	6	6	8	7
5	29	10	1	10
概要		<p>軍令陸甲才一四号により編成下令</p> <p>軍令陸甲才一五号により間島省土門子陸軍病院を春化陸軍病院と改称 最寄部隊よりの傷病兵の収容に任じた。</p> <p>一〇二次特臨編才二号により臨時編成(甲)下令</p> <p>那春県春化において編成完結</p> <p>引続き病院業務</p> <p>間島省和龍県龍井に移駐</p> <p>才十一号演習による患者の収容、治療</p> <p>龍井陸軍病院と合併</p> <p>和龍県八道河に移駐才一二七師団野戦病院としての業務実施</p>		
摘要				

## 春化陸軍病院略歴

(関東軍才六四陸軍病院)

通称号 満才九四部隊  
岩才二六七一八部隊

昭 21							
7		9	9	8	8	8	8
より		11	3	30	24	17	9
<p>八道河において日「ソ」開戦  同地において武装解除  間島陸軍病院に合併され、間島収容所に収容  間島才三作業大隊に編入  同地出発  理春経由入「ソ」</p> <p>なお軍医中尉佐藤英夫以下約二十名は、延吉才二八収容所において病院開設、延吉才四病院となり、昭和二十一年五月二十六日まで患者の治療にあたり、以後は延吉病院に業務を引つぎ、中共軍に解放された。</p> <p>壺盧島經由帰還  病院長  初代  自昭18、6、10、  至終戦 二代軍医中佐 米沢逸郎</p>							

昭 20	昭 19	昭 16	昭 15	昭 13	年 月 日
8	8	7	7	8	
9	1	16	10	5	
<p>日「ソ」開戦にともない板垣軍医大尉を長とする野戦病院を編成し、            図們・金倉に分院設置</p> <p>同日より病院業務を実施</p> <p>編成完結</p> <p>同日より最寄部隊の将兵、傷病者の収療</p> <p>軍令陸甲才一四号により編成改正</p> <p>一〇二次特臨編才二号により編成下令</p> <p>編成完結</p> <p>同日より最寄部隊の将兵、傷病者の収療</p> <p>新站衛成病院延吉分院が昭和十三年六月二十七日延吉臨時陸軍病院と病院            名を改称し、この病院を基幹として（改称による）</p> <p>編成完結</p>					<p>延吉陸軍病院略歴</p> <p>（関東軍才二八陸軍病院）</p> <p>通称号 満才九八七部隊            岩才二六七一二部隊</p>
					<p>概要</p>
					<p>摘要</p>

昭 21										
5	4	4	9	9	9	8	8	8	8	8
25	20	16	30	4	1	18	16	15	12	
<p>方面に出動</p> <p>日「ソ」開戦時の分院</p> <p>函們分院 草野大尉 能田重雄 以下約一八名</p> <p>金蒼 平川亮 以下約一四名</p> <p>金蒼分院は本部に合流</p> <p>板垣大尉以下本部に復帰</p> <p>函們分院は本部に合流</p> <p>同地において武装解除後も患者の治療続行</p> <p>一部ものは間島オ二四作業大隊に編入</p> <p>同地出発</p> <p>琿春經由入「ソ」</p> <p>「ソ」軍が撤退し、中共軍の指揮下に入り、医務続行</p> <p>高橋病院長中共軍に連行された。</p> <p>大部の軍医、看護婦は中共軍に連行された後二分され、一部は吉林省新</p> <p>站方面、一部は哈爾濱方面に行動後解放され、「コロ」島經由帰還および</p>										





昭										昭	年 月 日	第五軍司令部略歴
20										14		
8	8	6	8	7	12	12	9	5	8			
15										9	15	
<p>吉林省新京特別市において編成完結</p> <p>東安省林口に移駐、隸下部隊を指揮し東滿地区の警備</p> <p>「ノモンハン」事変に対し、出勤態勢。</p> <p>「ノモンハン」事変停戦協定成立につき出勤態勢解除</p> <p>移駐のため林口出発</p> <p>東安省密山県東安着、隸下部隊とともに東滿地区の警備</p> <p>特臨編一六令付第四号により編成下令</p> <p>戦闘配備につき、東滿地区の警備ならびに南方作戦の援助態勢となり編成完結</p> <p>以後昭和二十年六月まで、同地において東滿地区の警備</p> <p>軍令陸甲第八八号（作戦計画に基づく）により東安出発。同日牡丹江省寧安県</p> <p>掖河（第三軍司令部跡）に移駐、作戦に基づく準備態勢。</p> <p>日「ソ」開戦</p> <p>掖河出発、牡丹江市（第一方面軍司令部跡）に移動、同日牡丹江市出発</p>												
<p>通称号 満第二一一部隊 城第五〇三三部隊</p>												
<p>概要</p>												
<p>摘要</p>												

				8	8	
				31	18	
				<p>寧安県横道河子着。同地において武装解除。 同日拉古に移動。</p> <p>拉古において将校（佐官以上を除く）および下士官、兵は同地編成の第七作業大隊に編入。</p> <p>同地出發</p> <p>綏芬河經由入「ソ」</p> <p>佐官以上の将校は牡丹江市に至り、同地編成の将校大隊に編入</p> <p>牡丹江市出發。綏芬河經由入「ソ」</p>		
				<p>軍司令官</p> <p>初代 少将 土肥原 賢二</p> <p>二代 中将 飯村 稜</p> <p>三代 中将 波田 重一</p> <p>四代 中将 清水 規矩</p>		



	8
	26
師団長 中将 椎名正健	東京城編成第二七〇、第二七二、第二七三、作業大隊および将校大隊に編入。 入「ソ」。

至自		至自		昭		年 月 日	略 歴
10 8	8	8 8	8	6	2 1		
末 20	17	15 9	9	20	20 16		
<p>軍令陸甲第九号により編成下令。            牡丹江省綏陽県綏陽において第一一師団第八師団の転用に伴う残置人員および在滿各部隊の転属者を基幹として編成完結。            陣地構築のため綏陽より穆稜に移駐。            一部綏陽に残留、第三大隊は綏芬河に駐留。同地において陣地構築。            開戦。            穆稜陣地において、優勢な「ソ」軍と交戦し多大の損害を生じた。            綏芬河駐留の第三大隊は付近の天長山陣地において「ソ」軍戦車の急襲をうけ少数の脱出者の他は殆んど全員玉砕した。            停戦により敦化に集結のため行動開始。            以後武装解除まで絶えず攻撃を受く。            鹿道、敦化、大石頭、明日溝、東京城の各地で武装解除。            八達溝、蘭崗、東京城、敦化の各作業大隊に編入「ソ」。</p>							
<p>連隊長 大佐 安 土 武 比 古</p>							
<p>通称号 満第七六四部隊            遠謀第一三〇五一部隊 遠謀第一五二二三二部隊</p>							
<p>摘要</p>							

## 歩兵第二七一連隊略歴

2251

昭 20	年	至 自	至 自	至 自
2 1	月	6 5	8 8 8	9 8
20 16	日	10 4	14 11 9	10 16
<p>歩兵第二七二連隊 略歴</p> <p>通称号 満第八四八部隊 速謀第一三〇五二部隊 速謀第一五二二三部隊</p> <p>略 歴</p> <p>軍令陸甲第九号により編成下令。 牡丹江省綏陽県綏南において、国境守備隊の転属者、第一一師団、第八師団の転用に伴う残置者その他在満各部隊の転属者をもつて編成完結。 綏南出発、穆稜に移駐。 穆稜着、綏南には一部残留。 同地において陣地構築。 開戦。 穆稜南方高地および穆稜市街、緑山陣地、小豆山において戦闘し若干の損害を受け牡丹江街道の戦闘では損害大であった。 牡丹江―東京城―敦化および汪清の沿線において武装解除され入「ソ」</p> <p>連隊長 大佐 石川 栄 治</p>				
摘要				

2252

年月日	昭 20 16 20 初 6 2 1 8 8 22 9	自 至
略 歴	<p>軍令陸甲第九号により編成下令。 牡丹江省綏陽縣綏西において、第一一師団の転用に伴う残置人員および在満各部隊の転属者を基幹として編成完結。 一部を綏西に残置し、本部第一大隊、第二大隊は穆稜に移駐。 同地において、陣地構築。 第三大隊は老菜營に駐留していたが綏芬河北方観月台陣地において、第一一國境守備隊の既設諸陣地を引継ぎ、同守備隊砲兵隊の二八糧榴弾砲（②部隊）とともに国境監視陣地補強作業に従事。 開戦と同時に「ソ」軍の猛攻撃に会い穆稜陣地、観月台陣地はいづれも多大の損害をうけた。 第三大隊の観月台陣地は、半数以上の戦死者をだし少数の脱出者以外は生死不明になった。 第七中隊は、小豆山付近において「ソ」軍戦車の急襲をうけ三名のみを残し全員戦死。</p>	
摘要		

## 歩兵第二七三連隊略歴

通称号

満第二七三部隊  
遠謀第一三〇五三部隊  
遠謀第一五二二四部隊

略

歴

摘要

2253



	9	8
	12	28
	連隊長 大佐 瀬尾 浩	敦化より代馬溝を経て寧安着。 寧安より東京城作業第二七一大隊を編成。 東京城へ掖河を経て入「ソ」。

昭和20年		略	略		
月	日			略	略
7	7				
8	8	8	8		
29	23	18	10		
		9	30		
			10		
<p>昭 20</p> <p>通称号 遠謀第一五二三二部隊</p> <p>第一二四師団挺進大隊略歴</p> <p>軍令陸甲第一〇六号により編成下令。</p> <p>牡丹江省穆稜県伊林において、第一二四師団各部隊の転属者を基幹として編成          完結。</p> <p>編成以来開戦にいたる間伊林において挺進奇襲の訓練を実施。</p> <p>開戦とともに伊林出發、寧安に向う。</p> <p>大橋子着。同地において挺身奇襲を実施し損害甚大。</p> <p>寧安に向け前進中、「ソ」戦車の攻撃をうけ少数の損害を受けた。</p> <p>一部は王八堡子に到着。同地においてソ軍戦車の攻撃をうけそのほとんどの者          が戦死した。</p> <p>天橋岑において武装解除。</p> <p>東京城において作業大隊に編入「ソ」。</p> <p>隊長          大尉 川 勝 忠 三</p>					
			摘要		

2255

野砲兵第一一六連隊略歴											
通称号 満第一〇二部隊 遠謀第一三〇五四部隊 遠謀第一五二二五部隊											
略 歴											
昭	年	月	日							摘要	
20				1	2	6	7	7	8	8	
				16	20	30	2	10	30	9	10
<p>軍令陸甲第九号により編成下令。</p> <p>牡丹江省綏陽県綏西において、在満国境守備隊その他各部隊よりの転属者、第八師団の残置者<sup>を</sup>基幹として第一二四師団砲兵隊として編成完結。</p> <p>第一一国境守備隊、第二国境守備隊の改編に伴う編入により第一二四師団砲兵連隊となる。</p> <p>陣地構築のため主力は穆稜に移動を開始。</p> <p>残留隊を除き主力は穆稜に移駐完了。</p> <p>軍令陸甲第一〇六号により編成改正下令。</p> <p>野砲兵第一一六連隊の編成完結。</p> <p>開戦と同時に、綏西の残留隊は全員穆稜陣地に出発。</p> <p>穆稜陣地到着。</p> <p>牡丹江重砲連隊長の指揮下に入り対砲兵戦対戦車戦防護射撃等に任ず。</p> <p>小豆山に集結命令。</p> <p>小豆山に集結「ソ」軍と交戦<sup>激</sup>し損害甚大。</p>											

2256

355の2

至自

9 8 8

5 17 14

主力は教化方面に向い磨力石、代馬溝を経て東京城付近において武装解除。  
東京城第二七三作業大隊に編入綴芬河経由入「ソ」。

連隊長

中佐 中園 義 熊

2257



至自

9 8

3 18

「ソ」軍の急襲をうけ戦死、生存不明者多発。生存者は穆稜陣地に到着。主力は横道河子および東京域において武装解除。海林、東京域編成の作業大隊に編入「ソ」。

隊長

少佐 内田 龜夫

2259

昭							年	月	日
9	8	8	8	6	2	1			
9	23	15	9		20	16	略		
<p>隊長</p> <p>大尉 吉沢益雄</p> <p>東京城第二七〇作業大隊に編入綏芬河を経て入「ソ」。</p> <p>寧安において武装解除。</p> <p>牡丹江方面に行動。</p> <p>少数の分隊は師団の歩兵隊に配属され、歩兵部隊と同行動。</p> <p>綏陽の残置人員も主力に追及し合流。</p> <p>開戦と同時に一国山に集結各部隊内の連絡通信に従事。</p> <p>穆稜において陣地構築。</p> <p>一部を綏陽に残置、主力は穆稜に移動。</p> <p>よび在滿各部隊の転属者を基幹として編成完結。</p> <p>牡丹江省綏陽県綏陽において、第一一師団第八師団の転用に伴う残置人員お</p> <p>軍令陸甲第九号により編成下令。</p>							<p>第一二四師団通信隊略歴</p> <p>通称号 満第七四六部隊</p> <p>遠謀第一三〇五七部隊</p> <p>遠謀第一五二二七部隊</p>		
							摘要		

2260

昭 20										年 月 日	第一二四師団輜重隊略歴	
至 自												
8	8	8	8	8	8	8	8	6	2			1
末	24	21	15	13	12	10	9	24	20	6	略	歴
<p>軍令陸甲第九号により編成下令。</p> <p>牡丹江省綏陽県綏西において第一二四師団輜重隊および第九師団輜重隊の残置人員を基幹とし、その他在滿各部隊の転属者の編入をもつて、編成完結。</p> <p>一部人員を綏西に残置し主力は穆稜県穆稜に移駐。</p> <p>同地において陣地構築ならびに資材の輸送作業。</p> <p>開戦と同時に穆稜出発代馬溝陣地に移動、各部隊への補給業務に任ず。</p> <p>綏西残留隊も全員到着、主力に合流す。</p> <p>「ソ」軍戦車の攻撃により各中隊は連絡不能となり分離。</p> <p>掖河より牡丹江に後退。</p> <p>牡丹江出発。</p> <p>寧安 東京城 教化 において武装解除</p> <p>主力は各武装解除地において作業大隊に編入し九月初綏芬河經由入「ソ」。</p>										<p>通称号 滿第五六部隊 遠謀第一三〇五八部隊 遠謀第一五二二八部隊</p>		
<p>隊長 少佐 中島正彦</p>										<p>摘要</p>		

2261



										昭 20	年 月 日	略 歴	通称号 遠謀第一三九六〇部隊 遠謀第一三九九一部隊				
										2							
										10 8 8 8 8 8 8 5 5							
										1 18 16 14 11 10 9 31 1	20	日	略	歴	摘要		
隊長 中尉 星野重吉										<p>第一二四師団司令部兵器班として綏陽県綏陽において編成。 軍令陸甲第七五号により編成下令。 第一二四師団各部隊よりの補充により綏陽において編成完結。 開戦により移動兵器修理班を編成、綏陽出發穆稜陣地到着。 師団命令により彈薬疎開のため掖河に移動。 第五軍司令部の指揮下に入り牡丹江より穆稜陣地に彈薬輸送。 ソ軍機の空襲をうけ横道河子に後退。 一面波に到着。 一面波において武装解除。 海林第一四五作業大隊に編入綏芬河を経て入「ソ」。</p>							

2262

昭和20年		月	日	略	歴	摘要					
昭	20										
10	8	8	8	8	8	8	2	1			
10	18	17	16	12	10	9	20	16			
<p>軍令陸甲第九号により編成下令。          牡丹江省綏陽県綏西において編成完結。          駐屯地綏西にあつて入廠病馬の収容、診療、師団各部隊よりの病馬の運搬。          開戦とともに人馬、資材、重要書類の分散疎開を実施、穆稜陣地に出発。          伊林河着。橋梁爆破のため反覆代馬溝着。          代馬溝出發途中「ソ」軍戦車の襲撃をうけつゝ磨刀石を経て牡丹江に向う。          牡丹江着。市内火災のため横道河子に後退。          横道河子着。          横道河子において武装解除。          敦化第二四一作業大隊編入満洲里經由入「ソ」。</p> <p>廠長          獸中尉 樽 沢 義 夫</p>											

2263